

宅間派研究史料(稿)

平田, 寛

<https://doi.org/10.15017/2328567>

出版情報 : 哲學年報. 44, pp.25-48, 1985-02-27. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

宅間派研究史料(稿)

平 田 寛

1 長寛元年(一一三二)十月十七日、高野山大傳法院供養。大詫摩、大傳法院七間四面二階堂に兩界曼荼羅・十六祖師影をえがく。

柱繪三十七尊字印形被圖之、後壁中方五佛、東方五菩薩、西方五大尊、兩界曼荼羅各々九幅、紺地金泥大曼荼羅尊形、東曼荼羅後壁、南天鐵塔、龍猛菩薩以白芥子七粒二加持、其扉開入内、親金剛薩埵灌頂授^リ塔、高四尺餘歟、塔内大光明出現之相繪、西曼荼羅後壁、菩薩樹下成道初夜、顯樂果一道清淨之究極之故^ニ、遍空之如來驚覺蒙^ル、我是凡夫未知求處、我示諸佛所行處、唱起寶座禮^ニ油麻之佛^一給所繪、東西後壁繪、帥上座定智法眼筆也、兩界萬^ダラハ大詫摩筆也、東西壁十六祖師之眞影奉懸之、是曼荼羅同筆也。

西壁^ニ、大詫摩、樹尾春日住古筆者宅間也、又或處琢磨皆別人也歟。(大傳法院本願聖人御傳)

2 久壽二年(一一五五)、この年以前、繪師詫摩爲遠勝智、近衛院御願覺皇院八角二階堂内陣四本柱に、三十七尊を圖繪す。

覺皇院。本堂^ヲ東方八角二階堂五間四面也。近衛院御願。兼海上人建立也。内陣四本柱。

各々千石用途。都合四千石云々。一本三面月輪皆銅輪。其輪中三十七尊圖繪。繪師陀摩爲遠。法名勝智。法印也。（大傳法院本願聖人御傳）

久壽二年。七月廿三日、（近衛）天皇崩于近衛皇居。春秋十七年。來御不豫也。（百鍊抄第七、帝王編年記卷二十）

3 嘉應元年（一一六九）、この年以前、佛師勝賀、神護寺經藏の十二天屏風甲乙帖^二をえがく。

又十二天屏風甲乙帖、佛師勝賀法印筆、種字者紫金臺寺御室御筆也。（神護寺畧記 經藏）
嘉應元年十二月十一日壬辰、寅刻、於泉殿（紫金臺寺御室）御遷化、春秋四十一。（御室相承記 五）

4 承安四年（一一七四）八月廿三日、佛師爲遠法師、女院御逆修の御佛經にえがく。

廿三日丁丑、晴、今日不出行、女院御逆修御佛經令奉始之、佛師爲遠法師、經師法橋圓嚴、且下行料物之由、可仰御倉仲遠之旨、下知宗家先了。（吉記）

4補 爲遠作例

「 覺

一金胎佛畫帖 壹卷

應永廿七年^{庚子}正月十五日高野

山光臺院北寮ニ於テ重尊

大阿遮梨ヨリ弘眞へ賜ハル勝知

豊後守宅磨爲遠

一五三二

法印ノ筆ナリ勝知俗名ヲ豊後

守宅磨爲遠ト云フ

天文元 壬辰年七月

眞尊

〔願成寺覺書〕

下總權守藤原爲久
豊前守爲遠

5 壽永三年（一一八四）正月廿二日、豊前守爲遠三男、下總權守藤原爲久京都より鎌倉に參向す。

廿二日壬子。下總權守藤原爲久、依レ召自ニ京都ニ參向。是豊前守爲遠三男、無双畫圖達者也。（吾妻鏡 第三）

6 壽永三年（一一八四）、眞乘房勝賀、法橋に補任さる。

眞乘房 元八條先生出家及
勝賀 十年宅間冠者爲遠子
俗名爲基
（僧綱補任 壽永三年法橋）

7 元暦元年（一一八四）四月十八日、爲久、正觀音像を圖繪す。

四月十八日丙戌。依ニ殊御願、仰ニ下下總權守爲久、被レ奉レ圖ニ繪正觀音像。爲久着ニ束帶一
役之。潔齋已滿ニ百日ニ今日奉レ始之云々。武衛又御精進讀ニ誦觀音品ニ給云々。（吾妻鏡 第三）

下總權守爲久

8 同年（一一八四）八月十九日、爲久、歸洛す。

八月十九日乙亥。繪師下總權守爲久歸洛、賜御馬置鞍已下餞物云々。(吾妻鏡 第三)

9 文治元年(一一八五)八月廿三日、爲久、また京都より鎌倉に參着、新御堂に畫圖す。

八月廿三日癸酉、爲久自京都又參着。爲新造御堂畫圖也。(吾妻鏡 第四)

10 同年(一一八五)十月十一日、爲久、新御堂後壁に淨土瑞相ならびに二十五菩薩像を圖し、論あり。

十一日庚申。御堂佛後壁畫圖終彩色之功。所奉圖淨土瑞相并二十五菩薩像也。二品監臨給之處。圖淨土之所有三日月。而此月者以三已影隱三已影云々。今畫様頗不叶本說之由被仰之間、畫工不能改之。則削云々。(吾妻鏡 第五)

11 文治年中(一一八五—九〇)、佛師訛麻勝賀、神護寺根本曼茶羅を新寫す。

一 以根本曼茶羅、奉寫之、佛師勝賀法印、金銀泥者鎌倉右大將沙汰、御衣絹者同室二品禪尼沙汰也云々。(神護寺畧記 灌頂院)

(兩界曼茶羅) 新本者 文治年中、關東右大將家被施入於金銀泥、於御衣絹者二品禪尼施入也、佛師訛麻勝賀法印寫之。(神護寺畧記 灌頂院)

12 同年中(一一八五—九〇)、訛麻先生爲辰、神護寺金堂に八幡大菩薩影、納涼坊に弘法大師影、平岡に八幡大菩薩影を新寫す。

詫麻先生爲辰

八幡大菩薩像一鋪奉安置堂內良角帳、大師御筆、但二重內奉懸之上、新本。（神護寺畧記 金堂）
同像一鋪奉安置同帳

右文治年中淨覺上人以平岡御形像大師御筆第二寫本奉寫之、繪師詫麻先生爲辰也。（神護寺畧記 太上
天皇震筆御記文）

又一本（八幡大菩薩）御影者、文治年中淨覺上人仰詫麻先生爲辰令寫給。（神護寺最畧記
金堂）

同（大師影）像一鋪奉安同厨子。

右文治年中、以根本御影奉寫之、繪師詫麻先生爲辰也。（神護寺畧記 納涼坊）

又一本御影者、文治年中詫麻先生爲辰筆也。（神護寺最畧記 納涼坊）

奉安置八幡大菩薩御形像一鋪、大師御承平實筆第二傳、云々、鐵帳委細在之。（神護寺畧記 平岡神宮）

御形像者 大師御筆第二寫本也。

當社癡絶之間、開明房阿闍梨奉渡長峯寺、而文治年中淨覺上人相具繪師詫麻
先生爲辰、於長峯寺寫之、被安置當社之處、舊本之御影又令返當社早、仍如
舊安置之、彼文治本者令奉安置金堂者也。（神護寺最畧記 平岡）

13 建久二年（一一九二）十二月廿八日、東寺灌頂院供養、宅間法橋勝賀、兩界曼荼羅および
十二天屏風を新寫す。

十二月廿八日灌頂院供養、依修理也、但兩界曼荼羅新模也、大檀金臺界對之、片檀延果
依別、色衆卅口、布施公家御沙汰委別記在、又十二天屏風新奉寫依別、繪師宅間法橋勝賀、種子御
仰也。

宅間法橋勝賀

室三品親王守覺、本新相違之所在之、今日被安置之。(東寺長者補任)

建久二年辛亥年某月日、東寺灌頂院十二天屏風新奉寫、依朽損也、繪師宅間法橋勝賀、種子令書之給。(仁和寺御傳 喜多院御室〔顯證書寫本〕)

勝賀法橋

私云、檜尾僧都所圖曼茶羅破損之間、於三兩界曼茶羅一者、建久二年俊證僧正寺務時被新寫之、繪師勝賀法橋也。(東寶記 第二)

勝賀法橋

又建久二年俊證僧正長者之時、以三勝賀法橋一新圖書令懸三灌頂院云々。(東寶記 第二)

豐前五郎爲廣

14 建久八年(一一九七)四月、豐前五郎爲廣、高野山普賢院藏紙本墨畫五大力菩薩像を描く。

「建久八年四月 豐前五郎爲廣筆」(紙背銘)

15 建久十年(一一九九)四月、泉涌寺俊祐、安秀長賀二弟子をひきいて入宋。

翌歲(建久十年)四月、遂率安秀長賀二子、航海入宋。(泉涌寺不可棄法師傳)
但し、長賀は繪師長賀と同名異人歟。

16 建仁元年(一一〇二)十一月初、俊賀法橋、明惠上人所持の唐本紙形により善財善知識曼茶羅を圖繪す。

然間夫妻共起大願、書寫華嚴一宗章疏、又彼妻室投資具調度、圖繪善知識曼茶羅、先年建久比於或所、上人手自雖寫取善知識紙形、不及圖畫送數年一畢、爰喜海靈典爲使、持紙形并新物等上洛、其間八幡大菩薩有御守護之由夢想度也、入京之後詔佛師俊賀御橋

俊賀法橋

法橋勝雅

令圖繪之處、其宅前庭化鳥忽飛來、其大如鳥、其色似山鷄、俊賀執筆、寫留之、數剋之後出門而去、覓之不見、後日上人自記此事、書鳥像傍、其銘云、建仁元年十一月初、奉圖寫善財善知識唐本之日、佛師俊賀之家緣邊此鳥飛來、更不驚人、繪師五六同法二人喜海同見之、繪師染筆、圖此鳥形之間在之、綵色等皆終其功、後步行小門方、家人逐出見之、不知所在、色相形勢等瞻本質、圖之、華嚴傳中瑞鳥多顯異相、蓋斯類歟云々、其後雖相尋、諸人、世間都不知此鳥、於我國善財善知識万多羅四幅像也廣成、流布、此像始也、仍有此瑞歟。

同二月比於糸野成道寺、爲施主除病延壽祈禱、以如心偈爲所堅、行三問、堅義、奉供養此曼茶羅、彼短册上人自被草之、件曼茶羅被施入東大寺尊勝院學徒中了。(高山寺明惠上人行狀 上 建仁元年〔漢文行狀〕)

17 建仁二年(二〇二)十月十一日、法橋勝雅、京極新御所安鎮法の曼茶羅および十六幡を圖し、論あり。

建仁二年十月十一日壬午於京極新御所被修安鎮法(中畧)御支度同八日被進之、大概康治二年例也、少々取捨事、曼茶羅二幅、護摩壇方五淨衣十七領白色、承仕六人、又爲懸本尊佛臺可有用意之由(中畧)

八日

次西刻許、佛師法橋勝雅、銅細工貞仲被召進之、先曼茶羅并十六幡之形像等子細仰含佛師了、且曼茶羅圖樣、其上重令仰知御衣絹二輪也、三重曼茶羅也、中臺黃色不動二臂坐金盤石、身長八指云々、仍居タケ五寸六分歟、火焰中多有伽樓羅形云々、第二重紺青

色四臂不動、八幅輪如_レ先、立背坐_三瑟々盤石_一、第三重八方天等各乘_三獸坐_一（中畧）

次十六幡形像、白色幡八流可_レ圖_三四臂不動_一、如_三曼茶羅_一、但墨書也、八色八流八方天形像可_レ畫_レ之、所謂白色帝釋、黃色火天、黑色焰魔、慘色羅刹、赤色水天、青色風天、黃色多聞天、綠色伊舍那、註折紙賜之、但坐立事并墨書_三綵色事_一、明日可_レ被_下一_云。

次日九日、以_三御教書_一、天幡形像可_レ加_三綵色_一、座立如_レ常可_レ圖_レ之由、遣全兼阿闍梨奉書。
（中畧）

爲_レ任_三佛師計_一如_レ常可_レ圖_レ之由仰遣也_{云々}、次召_三細工輪等繪樣賜_レ之、子細具仰含了（中畧）

道場大畧承仕等拵_レ之、于_レ時慈賢入_三幕內_一致_三莊嚴_一、大體如_三十六幡送之_一、各所檢_三知形像_一、舊圖明王幡無_三相違_一、天幡形像皆立像圖_レ之、又無_三獸坐_一、而之間俄召_三佛師_一、坐_下如_レ形方々獸坐被_レ畫_レ之、如_三曼茶羅_一、佛師勝雅申云、先日所_レ被_レ仰_下一_{御教書狀}如_レ常可_レ圖_レ之之由仰下之間、世常所_レ知形像奉_レ圖也_{云々}、如_レ常者、曼茶羅定所_レ被_レ仰也_{云々}、而八天悉起立、此樣存外、何況不_レ畫_三獸座一條_一、勿論次第也、然而場莊嚴之間無_レ程書_三加獸座_一了、於_レ皆悉起立之形者、臨_レ時不能_レ改_レ之、仍今度八天皆立獸背、甚不_レ可_レ然歎。（門葉記 卷二九）

建仁二年十月十一日（中畧）

曼茶羅事、

二幅御佛、三昧和尚圖樣也、
勝賀法眼圖也。

十六幡事、

一有_三無幡_一、長七尺計也、八流、白色不動墨書、八流、色々各方天像綵色ナリ、色々次第如_三十六條殿記_一。佛師勝賀、立像

薩摩法橋俊賀

不_レ乘_レ物像圖_レ之、仍俄大將令_ニ入堂_ニ給、後召_ニ佛師_ニ立像之下各禽獸等令_レ圖_レ之了令_レ立_レ之云々。(阿婆縛抄 卷一三三)

18 建仁二年(一一〇二)十一月五日、佛師勝雅および弟子良雅ならびに小佛師ら兩三人、後

鳥羽院の熾盛光法の懸・敷曼茶羅を圖繪す。

建仁二年

佛師勝雅

十一月五日 西被_ニ仰遣_ニ曰、自_ニ來八日_ニ、可被修_ニ熾盛光法_ニ也。曼茶羅間筆、佛師勝雅可_レ

參也。子細具可_ニ仰含_ニ。兼又今度敷曼茶羅可_ニ新圖_ニ、店院之本可_レ令_レ寫之、彼本汝許預置

歟、於_ニ御持佛堂_ニ密々召_ニ佛師_ニ可_レ令_レ被覽_ニ也、寸法六尺壇可_レ被_レ敷_レ之可_ニ相斗_ニ云々御衣絹

自_ニ增圓法眼許遣_レ之。同六日佛師勝雅參_ニ御坊_ニ、先懸曼茶羅圖樣具仰_ニ含_ニ之、常定平等坊本樣

也、寸法二鋪之由仰了、件圖樣二重曼茶羅也、(中略)敷曼茶羅御本同令_ニ披見_ニ、寸法同仰

弟子良雅

含了、即佛師賜_ニ衣絹_ニ退出、付張可_ニ歸參_ニ云々 申刻許勝雅相_ニ具弟子良雅并小佛師兩三人_ニ

歸參、奉_レ寫_ニ秘本_ニ、同八日寅時許圖繪終_レ功、仍同辰刻令_レ遣_ニ九條殿_ニ了、是左大臣殿下梵

漢共可_レ有_ニ御書寫故_ニ也。(門葉記 卷二)

19 建仁三年(一一一三)四月九日、薩摩法橋俊賀、紀州保田庄において春日・住吉兩明神の

形像を圖す。

同(建仁三年)四月九日、佛師薩摩法橋俊賀ヲ相ヒカタラヒテ紀州ニ下向シテ、保田庄

尾尾ト云フ處ニシテ、御託宣ノ儀軌ニヨテ兩大明神ノ御形像此ヲ圖シ奉リ畢ヌ。

薩摩公佛師

同十九日、崎山兵衛尉良貞カ家ニシテ開眼供養云々、上人自ラ開眼供養云々。(明惠上人神現傳記〔上山家本〕)

19補 年代不詳。明惠上人、夢に錢一百を佛師薩摩公に與える。

一 又錢二百儲之、一百與薩摩公佛師、一百我持之乎、所持塗滅金銀珠等十九許貫具之。
(明惠上人夢之記)

20 元久元年(二二〇四)七月二十九日、勝賀法眼、五辻殿安鎮法の曼茶羅を圖す。

五辻殿安鎮法日記

元久元年甲子七月二十九日己丑開白八月三日(中略)

一 曼茶羅事

二輪御佛

勝賀法眼

三昧和尚圖様也、外八方天如圖、坐像乗獸也、勝賀法眼圖之。(門葉記 卷三十)

21 元久二年(二二〇五)八月、託摩法印證賀、善導眞影を圖繪す。

元久二年八月に 上人瘡病をわつらひ給事ありけり 月輪殿きこしめしおとろきて醫師をめされ 種々の療方をつくさるといへとも 治術かなハさりしかハ とりわき冥助をあふかれ 御祈請あらんために 託摩の法印證賀におほせて 善導和尚の眞影を圖繪せられ 後京極殿その銘をかゝせ給て 安居院の法印聖覺千時僧都に 御導師參勤すへきよし仰らる。

(法然上人繪傳 卷十七)

託摩法印證賀

同年(一一〇五)十一月二十二日、佛師勝雅、賀陽院安鎮法の曼茶羅および十六幡を書く。

賀陽院安鎮 元久二年十一月十二日甲辰始行(中畧)

御支度同十六日被進之、大畧如建仁二年御支度、但今度曼茶羅三幅、鎮具中大幕十帖九方料、中今度在此注也、此等外事支度無異。(中畧)

十九日佛師勝雅參御房、曼茶羅并十六幡形像等仰子細了、曼茶羅如先度、幡像等、明王幡ハ墨書一面四臂、八幅輪、如先立背、天幡ハ綵色座像也、子細具仰含了。

同二十日重八色幡并八方天形像印相等注折紙遣之了。(中畧)

天幡形像等在僻書、各方色天形像等有相違、赤色幡ハ圖羅刹天、青色幡ハ畫水天、綠色ハ畫風天、慘色ハ伊舍那天畫之間、臨時爲大違亂、兼被召仰之上、重遣注文、佛師不覺爲法失也、但召ニ佛師ニ、如形書改之了、已兩度現行違亂一同也、向後可有留意歟。(中畧)

一 幡事

明王幡八流白色、墨書不動一面四臂輪中在。(中畧)

天幡八流本方色綵色像乘獸也

皆龍頭有之綵色クモテ白木用之佛師勝賀天幡像皆書垂。故其夜被召御所書改了。(問葉記 卷二九)

一 賀陽院新殿安鎮日記

元久二年乙丑十一月廿二日甲辰

一 曼茶羅事

中臺金色二臂、二重四面四臂不動八體、三重八方天乘獸也。

一 幡事

佛師勝賀

明王幡八流、白色、墨書不動四臂、輪中住、乘獸也、天幡八流本方色、綵色像、一々皆龍頭有之、綵色、蜘蛛手、白木用之、佛師勝賀、天幡像ヲ皆書乖故、其夜被レ召ニ御所一書改了。(阿婆縛抄 卷二二三)

23 承元三年(一一〇九)八月一日、繪佛師勝賀、押小路殿の仁王講五大力繪像および最勝講釋迦三尊繪像ならび辨才天繪像を畫す。

承元三年八月一日壬戌 今日押小路殿新御所御祈 仁王講取勝講所被ニ始行也、予奉行、昨日俄承ニ御定所ニ催ニ沙汰ニ也、以ニ殿上之間ニ爲ニ其所、佛具取勝光院蓮花王院借ニ渡之、廳遣ニ目六ニ可ニ借渡ニ也

本尊仁王講五大力取勝講釋迦三尊 辨才天繪像同

仰ニ繪佛師勝賀一令ニ畫ニ之、用途自レ廳可レ申ニ沙汰、御經廳沙汰相可レ尋。(仙洞御移徒部類記)

繪佛師勝賀

繪師良賀

24 建曆三年(一一二三)四月二十六日、繪師良賀、有家・兼康・俊識および尊智とともに、法勝寺九重塔供養に際して賞をうく。

〔法勝寺九重塔供養〕

行事辨定高朝臣、季康、金堂并廻廊修理造實 繪師有家、兼康、俊識、同行
以上賞追可申請

權律師公縁、別當公、胤實識 能全、修理別當、尊長實識 法印院範、佛師院、實實識 湛慶、運慶、賞讓 法眼宣圓、定圓、賞讓
檢校法親王并繪師良賀、尊智

良賀法印
源慶法眼
源尊

ふし志ゆんかゑそう

已上追加申請也、(明月記)

25 建保三年(一二二五)五月廿五日より、佛師俊賀、伏見宮御逆修の阿彌陀像を圖す。

御逆修、建保三年五月廿四日壬午はじまる(中畧)

一 廿五日日別に御□□夕のせん法さるのとき阿彌陀

一 ふくかゑそうふし志ゆん御經そし一部(中畧)

一 廿九日にちへち

阿彌陀像一鋪佛師しゆんかそし一部

一 六月一日にちへち

阿彌陀一鋪しゆんかうかふてそし經一部(中畧)

一 四日日へち

阿彌陀像一鋪そし一部かふて(下畧)(伏見宮御記録 御逆修部類記)

26 建保五年(一二二七)六月二十三日、繪師良賀ならびに源慶・源尊、當麻曼茶羅第一轉新曼茶羅を書寫す。

仍繪師良賀法印并源慶法眼可致其沙汰也云々然間自建保三年乙亥二月八日五箇日之間模畫ツ々々臚備ツニ上覽ユニ可清書之旨被仰下サニ了。同四季丙子爲シテ數日之結構於阿波國浦庄ニ織ニ得方一丈五尺御衣絹ニ然源慶法眼不終功逝去。其子源尊等同五年丁丑三月十六日於彼庄ニ始書之同六月二十三日書寫之ニ了。(中畧)同八月十三日新備ニ觀覽ニ天氣尤叶ニ仍以畫師

源尊^ニ被^レ成^ニ法橋上人之位^一了、同八月二十七日被^レ納蓮華王院寶藏^一。(當麻曼茶羅疏 卷八)

27 貞應三年(一二三四)、この頃、法橋俊賀、高尾の淨覺より平岡の智月房舊跡を賜る。

法橋俊賀

平岡屋敷之内、於智月房舊跡者、可宛賜法橋俊賀之由、自淨覺御房、所被申候也、寺家宜令存其旨給候、且平岡沙汰人大進房眞遍之許へ、以此趣可令相觸給候、兼又於平岡沙汰者、自去比、被仰付大進房候了、同可令存其旨之由、別當僧都御房所候也、謹言

六月廿八日

(草名)

尋勝御房

(神護寺文書 貞應三年(〇)六・廿八 尋勝房宛某書狀)

28 嘉祿元年(一二三五)七月十五日、俊賀法橋、高山寺羅漢堂に唐本による繪像十六羅漢を施入。

一 羅漢堂一字

右堂者、本是改移上人禪堂、賀茂神主能久、佛光山所造進之禪堂也。爲羅漢堂、嘉祿元年七月十四日、寅頭盧尊

者自本堂奉移安羅漢堂畢、

繪像十六羅漢、一鋪二鉢、合八鋪、俊賀法橋寫唐本施入之。同十五日安置之、彼寅頭盧堂狹少、故定眞、喜海并諸

大檀那等、爲上人十三年之追福、新造立供養今羅漢堂了、仁治二年六月一日棟上、大工

沙彌性佛、(高山寺緣起)

俊賀法橋

俊賀法橋
俊賀法橋

宅磨左近將監爲行

俊賀法橋

29 寛喜三年（一二三二）三月、俊賀、神護寺藏絹本着色眞言八祖像を圖す。

神護寺灌頂堂八祖御影寛喜三年歲次（箱銘）
辛卯三月日

一 八大師影像各一鋪東西壁各四鋪懸之
俊賀法橋令圖之（神護寺畧記 灌頂院）

八祖御影者 以觀音院本仰俊賀法橋勝賢令寫之早
之子（神護寺畧記 灌頂院）

30 同年（一二三二）十月六日、宅磨左近將監爲行、鎌倉御願寺の地相を圖繪す。

六日戊午。霽。可被建御願寺之由有沙汰。被點其地於永福寺、大慈寺等内。兩國

司、駿河前司、出羽前司、隱岐入道、信濃民部入道已下、相具陰陽師三人秦貞、晴賢有
重宗

巡檢、令金藏房相此地。亦於當座、召宅磨左近將監爲行圖繪之。（吾妻鏡 第二八）

31 寛喜四年（一二三三）正月十八日供養の高山寺三重寶塔に、俊賀法橋、五秘密曼茶羅、華

嚴善財善知識、華嚴海會聖衆曼茶羅および六天像を圖繪す。

三重寶塔（中略）

後壁正面圖繪五秘密曼茶羅、

同後面圖繪華嚴善財善知識、

四柱圖繪華嚴海會聖衆曼茶羅、

三方、東西、扉圖繪六天像、已上、俊賀法橋筆（高山寺緣起）

32 寛元元年（一二四三）五月三日、この頃、俊賀法橋、住吉明神御影の皮紙形所持すとの誤聞あり。

裏書云

春日御影像四鉢之内

二鉢經藏安置之内、一鉢ハ紀州ニシテ圖繪本像、一鉢經袋長、二鉢鎮守奉籠之内、一體月輪禪定殿下之圖繪像、一鉢長五寸切取像

住吉御影像二鉢之内

一鉢經藏安置、紀州圖繪本像、一鉢長五寸切取像也、廣一尺六寸軸加定根本像也、長五尺軸加定、二形像共同之紙形同安置經藏了、

此外餘處更無ナリ、或人皮紙形俊賀法橋許アリト云々、極タル僻事ナリ、皮紙形皆取テ奉安置此中也、爲後代記之、喜海、

寛元元年卯三月廿一日、依法性寺禪定殿下之仰、爲奉納東福寺鎮守春日大明神之眞像圖繪之、仍三月廿一日奉納第四宮了、惠日房筆之喜海持參其記在別、

此外ニハ、他處ニハ一切ニ不令御ナリ、同年五月三日喜海記之
已上裏書也（施無畏寺文書）

33

建長五年（一二五三）十二月二十日、法印長賀、繪師在房・源尊・快智とともに賞を受く。

勸賞事云々

正三位藤原公持大宮院御給

正四位下源通頼院御給

藤原隆顯造國司

從五位上源康廣行事檢非違使

中原範景同

法印長嘉

法印長賀

從五位下藤原宗員工

大納言 藤原朝臣

左中辨藤原經俊朝臣

加賀權守藤原在房繪師

已上追可申請

法印昌円佛師隆円讓

院審同院繼讓

院尋讓同院口讓

法眼院宗佛師

院瑜同院惠讓

法印長賀繪師

源尊同

快智同

已上追可申請

(經俊卿記)

34

文永二年(一二六五)、この年以前、法印長嘉、正傳寺藏絹本着色兀庵普寧像を畫す。

兀庵既入洛、寄宿旅邸。師(慧安)先遺書、慰問退院歸朝之由、并敘延請拜謁之意、兀庵答書、其畧曰。淨法界身無出沒、或時東趨或時西、隨緣赴感不留礙、莫以去來分一齊。

又云、來命殷勤、無由辭避、但家常茶飯、勿致世禮、翌日果垂光降、人事既畢。以法衣頂相付師。其影、則崇公在日、命法印長嘉畫數鋪之中最本也。即自讚曰、生緣於西蜀、非獨遊日本、十方國土中、常頭俱坐斷。(東巖安禪師行實)

「生緣於西蜀 非獨遊日本

十方國土中 當頭俱坐斷

嘖 且緩々

京城正傳寺住持東

巖長老懸安御房求

讚 信筆爲書 前建長

寺宋朝傳法兀庵叟

宗覺禪師 普寧

〔兀庵普寧像自賛〕

34補 長賀作例

1 醍醐寺藏紙本墨畫不動明王像 一幅

〔不動尊 以高雄曼荼羅本樣摸之 長賀法眼筆〕(紙背銘)

2 米國ホリス氏藏絹本着色矜羯羅・制吒迦二童子像 二幅

〔長賀〕(朱字方印)

3 徳川達道氏舊藏絹本着色十六羅漢圖 二幅

〔長賀〕(朱字方印)

35 文保元年(二三一七)、この年以前、榮賀筆一山一寧賛觀音圖。

宅磨榮賀

宅磨榮賀畫例堅長二重廓印 觀音彩色 賛寧一山 (古畫備考 卷三二)

36 嘉曆二年(二三二七)九月二日、繪師入道了尊歿。

繪師入道了尊

嘉曆二年九月二日 繪師入道了尊死去六十三 (常樂記)

宅間式部大夫

37 元德二年(一三三〇)五月十七日、宅間式部大夫歿。

元德二年五月十七日 宅間式部大夫他界 (常樂記)

宅間遠江法印朝勝

38 元德四年(一三三二)八月十日、宅間遠江法印朝勝歿。

元德四年八月十日 宅間遠江法印朝勝他界 (常樂記)

繪所澤間式部法橋長祐

39 貞和六年(一三三九)正月二十五日、澤間式部法橋長祐、稱名寺藏絹本着色三千佛圖(一幅)

を圖繪す。

「繪所澤間式部法橋長祐(花押) 結緣衆 圓阿彌陀佛 眞賢 長尋 若犬 夜叉 空性

理本 貞和六年正月廿五日 始之

奉作金澤大工大夫太郎延正軸也 結緣衆 良賢(以下六十七名、略)(三千佛圖軸木銘)

40 觀應元年(一三五〇)十二月五日、四條堀河下野法印、立政寺藏絹本着色當麻曼茶羅圖を圖繪す。

「奉寫書美濃國厚見郡平田西庄澤田之講田談義所寺號立政寺當麻曼茶羅 願主智通能化 取立大檀那

同國谷合空性聖也 觀應元年庚寅十二月五日 謹敬 畫師四條堀河下野法印 後白河法上御畫師宅間登賀之子孫

畫師流可 得畫之」(當麻曼茶羅竹軸銘)

四條堀河下野法印
宅間登賀

41 觀應二年（一三五二）、この年以前、榮賀筆夢窓疎石贊聖德太子孝養圖

太子孝養影 贊夢窓 泉州源光寺什（圖畫考 榮賀）

43 文和二年（一三五三）、この年、タクマノ法眼ノ弟子、平心處齊（一二七八—一三六九）の畫像を圖す。

カ、リケル處ニ、タクマノ法眼ノ弟子京都ヨリ下リケルカ、城都ニテ久承及候、爲相看越タリ、彼畫師ニ前ニ御影ノ事ヲ密ニ語ケル、不可有子細領掌アリ、サレトモ和尚ニ相構而隱密ニテ候、心得給ヘシ、畫師ニ具ニ語ル、乍去閑ニ能々顔色容躰奉見、寫可給トアリ、或時和尚ヲホセケルハ、喝食昨日此エ來ル法師ハ何者ソト尋給フ、彼毛頭不覺、是ハ名代ノ畫師ニテ候カ、方丈様之御影ヲモ、且過寮ニテカキ候ト申サレケレハ、和尚御笑アリケル、紹安ヲ被召問セ給フ、答云、幸ニ畫師來候程ニ、カ、セ申候、取ヨセ御覽アツテ狂言アリ、此畫程ノ法師ナラハ美僧ヤトテ、含笑給テ被指置ケル、御小子聖宣庵主一圓ニ頂相ヲハ寫シ申也。（定光寺所藏覺禪禪師年譜）

文和二年癸己

師老病甚、欲隱居、建立退藏庵、此年海東之縑素來而求結緣、老龜仁幼稚之輩、難堪乘者入籠負來、受衣者也、後明安寺、洞雲寺、請師爲開山矣、一日衆評欲寫師頂相、師聞曰、先德影多終作鼠巢、愚老不分而何勞畫工耶、雖然密被圖、小喝出曰、和尚尊像彩之、師知否、師一笑、紹安侍者在旁、見機卽以彩畫懸、師一覽對圖云、如此吾其美僧哉、戲笑、一衆歡悅（覺源禪師年譜畧）

繪所澤間式部法橋長祐

43 文和三年（一三五四）八月、繪所澤間式部法橋、法雲寺の涅槃像を圖繪す。

涅槃像緣由

武彊六浦莊藏福寺常住涅槃像 大勸進聖

別當淨願坊圓慶在判

繪所澤間式部法橋長祐在判文和三年甲午

八月

（法雲寺 涅槃像緣由書）

44 至德三年（一三八六）五月十三日、詫磨掃部助入道淨宥、法光寺藏木造地藏菩薩像を彩色す。

「奉造立地藏菩薩像

干時至德三年丙寅五月十三日開眼畢

大檀那 岡部新左エ門入道妙高

佛所 若狹法眼

繪所 詫磨掃部助入道淨宥（宏）

右所注如斯

「（像内銘）

45 應永二年（一三九五）、この年、常盤山文庫藏榮賀印絹本着色柿本人麿像に性海靈見（一三一

五一九〇）着賛。

「三十一字第一祖

扶桑國裏同風濟

吟堯夢寒明浦月

芳名不朽三千秋

本朝人丸遺像

常在光院主

退耕杜多八十一〔畫賛〕

〔榮賀〕〔朱字方印〕

45補 榮賀作例

1 藤田美術館藏絹本着色十六羅漢圖 一六幅

〔詫磨法眼榮賀筆〕〔落款〕〔榮賀〕〔朱字方印〕

2 大樹寺藏絹本着色涅槃像 一幅

〔詫磨法眼榮賀筆〕〔落款〕〔榮賀〕〔朱字方印〕

3 京都國立博物館〔舊頂妙寺〕藏絹本着色釋迦三尊および羅漢圖 二幅

〔詫磨榮賀筆〕〔落款〕

4 靜嘉堂藏絹本着色不動明王および二童子像 一幅

〔詫磨榮賀筆〕〔落款、但し金泥〕

5 出光美術館藏絹本着色山越阿彌陀三尊圖 一幅

〔詫磨榮賀筆〕〔落款、但し金泥〕

6 フリア美術館藏絹本墨畫淡彩文殊菩薩圖 一幅

「榮賀」(朱字方印)

7 個人藏絹本墨畫布袋圖 一幅

「榮賀」(朱字方印)

宅間派研究主要論文

濱田青陵	神護寺の十二天屏風	國華	二〇六號	一九〇七(明四〇)年	七月
椎軒	宅摩勝賀筆十二天屏風	國華	二一二號	一九〇八(明四一)年	一月
瀧精一	詫摩榮賀筆不動明王圖	國華	三九七號	一九二三(大一一)年	六月
瀧精一	詫摩榮賀の畫に就いて	國華	四六五號	一九二九(昭四)年	八月
文部省	兀庵普寧像	日本國寶全集	四七輯	一九三一(昭六)年	十月
田中一松	俊賀法橋について	日本美術協會報告	四〇册	一九三六(昭十一)年	四月
文部省	神護寺藏眞言八祖像	日本國寶全集	七二輯	一九三六(昭十一)年	九月
渡邊一	東寺十二天屏風考	美術研究	六〇號	一九三六(昭十一)年	十二月
朝日道雄	勝賀佛師の圖畫について —安鎮家國本尊曼荼羅について	密教研究	六三號	一九三七(昭十二)年	八月
白畑よし	詫摩榮賀筆人麿像について	國華	六六四號	一九四七(昭二二)年	七月
田中一松	長賀筆十六羅漢圖	國華	六八三號	一九四九(昭二四)年	二月
田中一松	金胎佛畫帖と宅磨爲遠	大和文華	十二號	一九五三(昭二八)年	十二月
高田修	東寺と正系現圖曼荼羅の相承 —新出大幅彩色古曼荼羅三本の調査概報	佛教藝術	二四號	一九五五(昭三〇)年	四月

『日本繪畫史論集』所收
(一九六六・三)

森 暢	文覺上人の畫像について	美術史	三二號	一九五九(昭三四年)	三月	『鎌倉時代の肖像畫』所收 (一九七一・十七)
蓮 實 重 康	託摩勝賀論——鎌倉時代における宋元佛畫の作風の影響の問題	美術史	三六號	一九六〇(昭三五年)	三月	
田 中 一 松	俊賀法橋筆眞言八祖影について	國華	八一八號	一九六〇(昭三五年)	五月	『日本繪畫史論集』所收
水 尾 博	託摩勝賀筆十二天屏風	國華	八一八號	一九六〇(昭三五年)	五月	
高 田 修	東寺の兩界マンダラ圖	佛教藝術	四七號	一九六一(昭三六年)	十一月	
田 中 一 松	長賀作品の一考察——玲羯羅制吒迦二童子像の解説に因んで	美術史	四四號	一九六二(昭三七年)	三月	『日本繪畫史論集』所收
石 田 尚 豐	繪佛師の動向(一—五)	國立博物館 ニュース	二一八— 二二三號	一九六五(昭四〇)年七—十月		
森 暢	眞言七祖像の系譜			一九七一(昭四六年)	七月	『鎌倉時代の肖像畫』所收
豐 岡 益 人	榮賀筆涅槃圖	愛知縣立藝術 大學紀要	一號	一九七二(昭四七年)	三月	
山 本 興 二	託摩派雜考——技法を中心に	美術史	八五號	一九七二(昭四七年)	六月	
海老根 聰 郎	默庵とその時代	日本水墨畫大 系	五卷	一九七五(昭五〇)年	十一月	
平 田 寬	明恵の周邊——恵日房成忍と俊賀の場合	哲學年報	三四輯	一九七六(昭五一)年	三月	